

主 文
原判決中被告人に関する部分を破棄する。
被告人を懲役六月に処する。

押収にかかる現金四千元（東京地方裁判所昭和三八年押第九〇〇号、当
庁同年押第六九六号の１）、現金四万九千五百円（同１６）、花札参箱、寺袋壹
枚、受皿壹個、盆布壹枚、毛布壹枚、止め鋏二拾四本、替銭札貳拾枚、海綿壺貳
個、メモ帳五冊、メモ紙片七枚、二色鉛筆貳拾五本、寺箱壹個及び小刀壹挺（同１
７ないし２９）は、これを没収する。

理 由

本件控訴の趣意は、弁護人遠山丙市提出の控訴趣意書に記載されたとおりである
から、ここにこれを引用する。

職権により調査すると、原判決は、その理由中において、押収にかかる現金五千
百円（東京地方裁判所昭和三八年押第九〇〇号の２、４）は被告人の本件賭場開張
図利の犯行を組成したもので、犯人以外の者に属しないから、刑法第十九条第一項
第一号第二項によりこれを没収することとする旨説明し、主文において、右現金と
被告人の右犯行により得た現金五万三千五百円（同１、１６）（いわゆる寺銭）と
を合算した現金五万八千五百円を没収する旨の言渡をした。しかし、司法警察員
の現行犯人逮捕手続書及び搜索差押調書に被告人の当審公庭における供述を総合す
ると、右現金五千百円中四千元（同２）は被告人が司法警察員により本件の開張中
の賭場に臨検され搜索を受けた当時、該賭場に集り賭博に参加した客が賭博に供す
る目的でその手もとに所持していたいわゆる場銭であり、千百円（同４）は、当時
右客が現に行なっている賭博に賭したいいわゆる賭銭である〈要旨〉ことが認められ
る。しかして、賭場開張図利罪は、利益を得る目的で自らの主宰のもとに賭博をさ
せる場所を〈要旨〉開設する行為があることによつて成立し、現実に賭博が行われた
ことを必要とするものではないから、右のごとき場銭及び賭銭は、法律上同罪の構
成要素をなすものとはいえず、したがつて、本件犯罪行為を組成したものには当ら
ないというべきであり、他に右各金銭の没収を適法かつ相当ならしめるべき事由を
認めることができない。されば、原判決がこれを没収したのは、法令の解釈適用を
誤つたものであり、この誤は、判決に影響を及ぼすことが明らかである。

よつて、控訴趣意（量刑不当の主張）に対する判断は、ここではこれを省略し、
刑事訴訟法第三百九十七条第一項第三百八十条により原判決中被告人に関する部分
を破棄し、同法第四百条但書により当裁判所は右部分につき次のとおり判決する。

原判決が適法に認定した被告人に対する罪となるべき事実法令を適用すると、
被告人の所為は、刑法第百八十六条第二項に該当するのでその所定刑期範囲内で量
刑すべきところ、情状を検討すると、記録によれば、被告人は、昭和三十年頃東京
都台東区a界隈を根城とする博徒A一家の身内となり、昭和三十四年頃から貸元と
してb町一帯を縄張りに持ち、賭場の開張を渡世としていたものであることが認め
られ、以上の点に記録に現われている被告人の境遇、年令、性行、前科関係、犯罪
後の情況その他諸般の事情を総合して考量したうゑ、被告人を懲役六月に処し、主
文第三項掲記の物件中現金四千元（東京地方裁判所昭和三八年押第九〇〇号の一）
及び現金四万九千五百円（同１６）は、本件犯罪行為により得たものであり、その
余の物件（同１７ないし２９）は、本件犯罪行為に供したもので、いずれも被告人
以外の者に属しないから、同法第十九条第一項第三号第二項によりこれを没
収することとし、主文のとおり判決する。

（裁判長判事 坂間孝司 判事 栗田正 判事 有路不二男）